

主体的に運動に取り組む 児童の育成

本務校名：岡山県総社市立清音小学校

配置教員名	池田 笑美加
担当学年	1. 総社市立清音小学校 第3・4学年 2. 総社市立総社東小学校 第2・3学年

Plan：取組時の課題と目標

1 取組時の課題

児童の実態から、運動が苦手な児童と得意な児童の運動への意欲の差を感じている。また、新体力テストの結果から50m走、握力、投力に課題が見られた。

環境面では、授業開始までに場の設定を行うことができていないことや、運動が苦手な児童に対して、個別の対応ができる環境が作りにくいということがあげられる。

2 取組の目標

- (1) 4月、7月、10月、3月に体育授業アンケートを行い、全ての担当学年で「体育の授業が楽しい」「運動やスポーツをすることが好き」の児童の割合が90%に達することを目標に、日々の授業の充実や授業時間外の工夫をすることで、最終的に体力向上に繋げる。
- (2) 授業時間外(業間・昼休み)も自ら運動に取り組む児童を増やす。
- (3) 新体力テストの結果から見えた、弱みの部分を強化できる環境を作り、来年度の新体力テストに生かす。また、正しい測定方法を学校全体で共通理解し、教員の意識向上にも繋げる。

Do：取組の内容

- (1) 体育授業の工夫と充実。
- (2) 4月、7月、10月、3月に体育授業アンケートを行い、定期的に調査を行うことにより変化を見取る。調査の中で運動やスポーツをすることが好きではない児童に対して、スモールステップを大切にされた支援を行う。
- (3) 県外の授業視察や様々な研修で得た内容を校内で情報共有をし、参考になるものは取り入れる。
- (4) 授業時間外(業間・昼休み)に児童とともに体を動かし、運動の習慣化へ繋げる。(全校縄跳び、チャレンジ走)
- (5) 運動委員会として運動に親しむことができるイベントを行う。(業間逃走中、懸垂チャレンジ)

●工夫したこと

- (1) 体育授業の充実(主体的に取り組むことができる環境づくり)
 - ① 学びを委ねる場の設定(個人やチームで選択する場面を多く設け、考えて活動する。)
 - ② スモールステップで取り組める環境作り
 - ③ 怖い、痛いなどの恐怖感を軽減する工夫

④ ルールの工夫(児童で少しずつ変える。)



- (2) TTの強みを生かした授業
担任の先生と連携を取り、個別にアプローチを行う。
- (3) 運動時間や量を確保するため、授業開始までに場の設定を行う。



- (4) ホワイトボードや掲示物で視覚化
 - ① 今まで学習してきたことやポイントを掲示し、意識して取り組むことができるようにする。
 - ② 目標値を視覚化することで、明確に目標を意識して取り組むことができるようにする。



(5) 校内の体育的活動の充実

- ① 運動委員会による企画や業間体育など
- ② 握力ブースの設置、全校逃走中、授業前にサーキットを実施する。



- ③ いきいき岡山っ子☆運動習慣カードの活用
- ④ 体育授業エキスパート派遣事業の活用

(6) 授業アンケートで、理由も書くことにより、苦手な理由を教員側も把握して、個別にアプローチを行う。



Check：取組の成果

- (1) 11月アンケートの結果から、清音小学校4年生の結果は「体育の授業が楽しい」と答えた児童が90%に達した。しかし、その他の担当学年は、90%に達していない。中でも、総社東小学校は減少している点を課題に感じる。種目の特性も大きいと考えるが、特に運動に対して苦手意識がある児童へ、どのようにして運動の特性（楽しさ）を伝えていくかが大切になる。

アンケートで、体育の授業は楽しいと答えた児童の理由の中で、「できないことに挑戦する時が楽し

いから。」「苦手なことができるようになると楽しいから。」「前よりもできるようになったら嬉しいから。」「どんどん記録を伸ばしていけるから。」など、技ができるようになることや記録を更新する楽しさは、1学期よりも多くの児童が感じていた。今後は、さらに、多くの楽しさや嬉しさを実感できるようにしていきたい。

- (2) 自ら運動に取り組む児童が増加した。これについては、アンケートなどを実施していないため、数値での変化は見取ることができないが、技ができるようになりたい！上手になりたい！という思いから、業間や昼休みに児童から「見てください！」という声掛けが多くあった。また、握力ブースの設置に伴い、記録にチャレンジする児童が多く、記録を更新してランキングに入ることができるようになり、何回も挑戦する姿が見られた。これらの様子から、4月よりも自ら運動に取り組む児童が増加したように感じた。

Action：今後の課題

【自身の課題】

- (1) 苦手意識をもっている児童こそ、「楽しい！できた！」という感覚を大切に、苦手から好きに変わるように努力する。
- (2) 場の設定の工夫や知識を増やす。
- (3) 児童が感じる“楽しい”を増やす。
 - ・体育の楽しさを色々な視点から感じることができるようにする。“する、見る、支える、知る”の視点から楽しさを感じることができるような声掛けや授業作りを行う。

【事業の課題】

- (1) 体育専科を増やし、情報交換を行い切磋琢磨して岡山県の体力向上に繋げていく。
- (2) 中・高学年に上がるにつれて、運動を苦手とする子どもは増える傾向にあるため、小学校の中・高学年に体育専科を取り入れることも有効だと考える。

◎体育授業の充実がもたらす波及効果

- (1) 何事にも挑戦する力
“できた！！”という達成感を味わうことで苦手なことにも挑戦する力がつく。
- (2) 伝える力、コミュニケーション能力の向上
振り返りを具体的に書くことで、伝える習慣がつく。
- (3) 認め合い、高め合う関係作り
相手の意見を受け入れ、認め合い、ともに一生懸命取り組むことにより、高め合うことができる。
- (4) 努力する力
「技ができるようになりたい！」「もっと記録を伸ばしたい！」という気持ちから、努力を重ねることができる。